室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

メタファの構造 (1)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-03-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 橋本, 邦彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/1131

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

メタファの構造（1）

その他（別言語等）のタイトル	The Structure of Metaphors (1)
著者	橋本　邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	36
ページ	265-305
発行年	1986-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/1131

メタファの構造（1）

橋　本　邦　彦

The Structure of Metaphors（1）

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract

The aim of the present article is to explicate the structure of metaphors. In section 1, we outline the main theories on metaphors, including selection restriction, comparison of similarities, converstational principles and semantic extension, and then point out their respective problems. Section 2 deals with nominal metaphors among three types of metaphors, namely, nominal ones, predicative ones and sentential ones. The nominal metaphors consist of a subject nominal, a predicate nominal and copula "be". Firstly, the former two are analyzed from the point of view of their referentiality. Secondly, the characteristics of the copula "be" are explored in terms of the intension function/the extension function. Considering these facts, section 3 leads us to the epistemological representation of metaphors.

0. はじめに

メタファは，人間の認識の仕方を表示すると言われる。いや，もっと過激な言い回しを用いてもよいかもしれない。メタファは人間存在の有様を顕わにする，というようにである。

メタファの解明に立ちはだかる最大の敵は，このような極めてメタファ的なレトリックである。それは，メタファの単純明快な実相を，複雑怪奇な姿にしたてあげてしまっている。従来かまびすしい程に戦わされてきた研究―哲学的，心理学的，言語学的，文学的，修辞学的，等々―は，おしなべてメタファそのものではなく，メタファにまとわりついて離れない幻影を肴に酌み交わされた酒宴のごときものなのである。

先人たちの業績に敬意を表しつつも，本研究は，幻影を極力排除して，言語表現の一形体であるメタファの実相を扱うことに専念する予定である。そのためには，メタファの主要な説明原理を概説し，それらに潜む問題点を簡潔に暴き立てることから始める。こうして幻影を振り払った後で，言語表現としてのメタファの構造や機能及び特性について，言語学の視点から言い得ることだけを語っていくことにしたい。

1．主要な説明原理と問題点

1－1．選択制限違反による説明と問題点

ある文がメタファであるか否かを判定する基準として選択制限 (selection restriction) 違反を導入する考え方がある。選択制限は，Chomsky (1965) で精密化された統語上の概念で，語彙項目 (lexical items) 間の共起制限を記述することを職務としている。

例えば，文(1)を観察すると，(1a) は適格であるが，(1b) は不適格であると判断される。

(1) a．Sincerity frightens the boy.

b．＃The boy frightens sincerity.[1)]

その理由は，二つの名詞，boy と sincerity が固有にもっている素性と動詞 frighten に指定される選択素性 (selectional features) とが，(1a) では満たされているのに対して，(1b) では満たされていないからである。

(2) a．sincerity ：〔＋ Abstract, － Animate,...〕

b．boy ：〔－ Abstract, ＋ Animate, ＋ Human, ＋ Male,...〕

c．frighten ：〔＋〔＋ Abstract〕_____〔＋ Animate〕〕

(2)をつき合わせての(1)の文の判定は，通常の文の意味上の適格性には有効であるが，そうだからといって選択制限に違反し不適格とされた文が完全に当該言語から排除されてしまうわけではない。(1b) は文法的な文ではないかもしれないが，解釈可能な文だからである。

Lyons (1981) は，範疇の不一致 (categorial incongruity) は無意味な文 (meaningless expressions) を産み出すが，選択制限違反は有意味な矛盾表現 (meaningful contradictions) を産み出すと述べている。範疇の不一致というのは，下位範疇化 (subcategorization) の違反とも呼ばれるもので，(3)のような解釈不可能な文を生じさせる。

(3) *Boy the sincerity frightens.

選択制限に違反した有意味な矛盾表現をメタファとして解釈することは可能である。言い換えるなら，(1b) は，通常の文の解釈を求めた場合には，文法上不適格であるが，メタファの解釈を付与すると適格になるということである。メタファとは選択制限に違反した解釈可能な文であると定義できる。

しかしながら，この定義に基づく説明には，いくつかの問題点がある。

第一の問題点は，選択制限を規定する素性の任意性である。

自動詞 laugh には，おおよそ次のような選択素性が与えられる。

(4) laugh：〔〔＋ Human〕____〕

したがって，laugh の主語にくる名詞は，〔＋ Human〕を固有素性として含んでいなければならない。

(5) a．The boy laughs.

b．#The chimpanzee laughs.

c．#The forest laughs.

d．#Beauty laughs.

(5a)以外の文は，〔＋ Human〕をもっていないため laugh の主語にはなり得ず，不適格な文と判定される。

名詞は固有素性と動詞の選択素性に記載されている〔＋ Human〕は，上記の説明では，ア・プリオリな存在物であるかのような響きをもつ。けれども，その実体は極めてア・ポステリオリな性格を有している。

例えば，動物生態学が十分進歩して，チンパンジーも人間のように意志をもち，ある一定の顔面筋肉の収縮が笑いの表現であるという事実が発見された場合，(5b)は(5a)と同程度に適格な文になる。意志の存在が笑いと結び付いていることがわかれば，laugh という語彙項目に付される選択素性も〔＋ Voluntary〕のように変更されなければならないだろう。

(6) laugh：〔〔＋ Voluntary〕____〕

この選択制限の指定によって，文(7)はすべて適格であると判定される。

(7) a．The boy laughs.

b．The chimpanzee laughs.

c．The ex–terrestrial man having will laughs.

このように，選択制限を指定する素性には，言語固有の実体というよりも，言語外の知識の反映物であって，知識の変動に従って変更を強いられ得る性質のものなのである。

第二の問題点は，繋辞 (copula) の be 動詞を含む文に関係している。

(8) a．The boy is a student.

b．#The boy is a wolf.

c．#The boy is a car.

(8b–c)の不適格性は，be 動詞の選択制限に原因があるのではないように思われる。というのも，それぞれの文の主語に異なる名詞を入れ換えてやると，適格な文になるからである。

(8)′b′. The animal resembling a dog is a wolf.

c′The vehicle with four wheels and driven by a motor is a car.

もし，繋辞の be に選択素性を求めるならば，三通りの指定をしなければならないだろう。

(9) a．be_1：〔〔＋ Human〕____〔＋ Human〕〕

b．be_2：〔〔＋ Animate〕____〔＋Animate〕〕

c．be_3：〔〔－ Abstract〕____〔－ Abstract〕〕

しかも，(9)の指定だけでは不十分である。なぜなら，(9b)の〔＋ Animate〕は〔＋ Human〕

の上位の素性であり〔− Abstract〕は〔− Animate〕の上位の素性であるので，各々から下位の素性を排除する機構をつくらなければならないからである。

be 動詞の前後の名詞の照合は，要するに，世界知識に基づいた常識の問題である。現実世界では boy は wolf ではないし，car でもないのである。(8b−c)が意味解釈上おかしいと感じるのは，選択制限の抵触というよりも，言語外のコンテストによるのである。

第三の問題点は，選択素性が両義的であり，したがって，選択素性に違反しているかどうかを確定することの困難な動詞の存在である。

⑽ a．Despair drove her into madness.

b．Her husband drove her into madness.

動詞 drive は，主語に，(10a)では despair のような抽象名詞を，(10b)では husband のような具体名詞を各々とっている。しかも，二つの文とも英語では非メタファの平叙文である。

drive の選択素性は，⑽の事実を踏まえて指定すると，次のようになる。

⑾ drive：a．〔〔+ Abstract〕 ____ 〔+ Human〕〕

b．〔〔− Abstract〕 ____ 〔+ Human〕〕

同じ素性〔Abstract〕に関して，全く正反対の値を示す名詞が主語の位置にくるのである。

drive タイプには，他にもたくさんの動詞が加わえられる。一例をあげると，force も⑽と並行したふるまいをする。

⑿ a．An 11% drop in the price of oil coupled with spiraling interest rates forced international bankers to cobble together an emergency rescue plan. (Time, '86, 3/24)

b．The president forced the anti−government guerrilla to surrender immediately.

⒀ force：a．〔〔+ Abstract〕 ____ 〔+ Human〕〕

b．〔〔− Abstract〕 ____ 〔+ Human〕〕

⑽，⑿のように両義的な動詞を含む文では，それが選択制限に違反しているか否かを指定することは非常に難しい。それゆえ，メタファであるか否かを指定することも当然至難の技になるわけである。

第四の問題点は，選択制限に違反しなくてもメタファとして成立する文が存在するという事実である。

⒁ a．The lion roared fiercely.

b．The rock is getting fragile.

⒁は共に字義通りの意味で解釈することができる。ライオンは激しく吠える動物であるし，岩は何らかの原因でもろく砕け易くなることがあるからである。

主語名詞の固有素性と動詞の選択素性をあげると，次のようなものになる。

⒂ a．lion：〔− Abstract, + Animate, − Human, + Carnivorous,...〕

roar：〔〔＋ Animate〕 ____〕

b．rock：〔－ Abstract,　－ Animate, ＋ Mineral,...〕

fragile：〔____〔－ Abstract,　－ Animate〕〕[2)]

名詞と動詞又は形容詞との間の選択制限は，妥当な形で成立している。⒁の文の前に，各々，文を付加すると，当該の文はメタファの解釈を帯びる。

⒃ a．The king was unable to restrain his anger against his daughters. The lion roared fiercely.

b．Our professor is going to retrieve from the university under the age limit next March. So the rock is getting fragile.

選択制限に違反しなくてもメタファが成立するのであれば，メタファの判定のための信頼し得る基準ではないことがわかる。

四つの問題点を概観してきたが，選択制限は，それを規定する素性の任意性，繋辞の be 動詞を含むメタファの判定不可能性，選択素性の両義性，違反しないメタファの予測不可能性などの理由により，絶対的な基準になり得ないことがわかった。選択制限の違反の認定によるメタファの発見は，一見，何が文をメタファにするのかに焦点を当てた手順のように思われるが，実態はあらかじめ一定の枠組を設定して，その枠内にうまく収まるものだけをメタファとして認め，それ以外をふるい落としてしまうという危険性を孕んでいるのである。

1－2．類似性による説明と問題点

広く流布しているメタファの理論に，類似性に基づく説明解釈がある。主語名詞と述語名詞の共有する類似性の引き当てが，その理論の根幹をなす。類似点は二つの語彙項目間に沈澱していて，それは見つけ出され掬い上げられるのだと考える研究者がいる一方で（Beekman and Callow (1974)，Cohen (1979)），二つの名詞の共同作業によって創り出されると主張する研究者もいる（Johnson and Lakoff (1980)，リクール(1984)）。

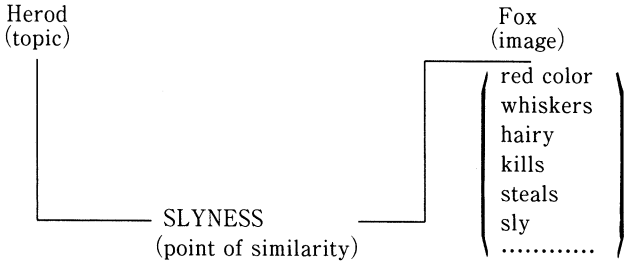
いずれにせよ，この考え方でとらえられるメタファの定義とは，暗示的な類似性の比較である。

⒄ A metaphor is <u>an implicit comparison</u> in which one item of the comparision (the "image") <u>carries a number of components of meaning</u> of which usually only one is contextually relevant to and shared by the second item (the "topic"). (Beekman and Callow (1974：127)，下線は筆者による)

述語名詞は一定の数の意味素性 (components of meaning) をもっている。そのうちの一つがコンテクストの力を借りて，主語名詞の含む意味素性と関連しているか共有されていることが発見され，類似性の引き当てが暗示的に行なわれるのである。

Herod という人物はコンテクストからずるい性質の持ち主であることが判明している。一方，

(18) Herod is a fox.



fox は一定数の意味素性を固有にもっていて，その目録から〔Slyness〕に焦点が当てられ抽き出される。こうして，Herod と fox とは，〔Slyness〕を介して出会うのである。

Cohen (1979) はさらに積極的で，Herod が指定する〔Slyness〕は fox の有する他の意味素性を削除するものと考える。メタファ化を被ることで，fox には〔Slyness〕という素性だけが残されるのである。

Johnson and Lakoff (1980) も，⒅のような説明原理を肯定しているが，それに加えて，類似性の創造をも強調する。

⒆ Though the metaphor may be based partly on isolated similarities, we see the important similarties as those created by the metaphor. (Johnson and Lakoff (1980：154)，下線は筆者による)

それは，二つの意外なとり合わせの語を引き合わせることによって，今まで意識されていなかった類似性に目を向けさせることである。新しい類似性への志向は，生き生きしたメタファを産出し，我々の経験や認識の範囲を拡大してくれるのである。

このように見ていくと，類似性を通してのメタファの説明には，十分な説得力があるように思われる。ところが，少し注意深く観察すると，三つの問題点が浮び上ってくるのである。

第一の問題点は，指定される意味素性は語彙項目自体の固有の，客観的に検証されるものではなく，主観的な，慣習的な性格のものであることが多いということである。

⒅を例にとるなら，“fox” という語彙項目に含まれる意味素性〔red color, whiskers, hairy, kills, steals, sly〕のうち，比較的検証可能なものは〔red color, whiskers, hairy, kills〕であり，〔steals, sly〕は人間の側からとらえた，しごく主観的な評価の表われにすぎないのである。メタファの扇の要ともいうべき類似性〔Slyness〕は，fox 自体のもつ特性ではなく，慣習的に行われている人間たちの一つの見方の反映物であって，fox には何の負うべき責任もないのである。メタファにおいて見出される，あるいは，創造されると言われている類似性の多くには，こうした一人よがりの評価という危うい面が顔をのぞかせているのである。

もし主観的な類似性を嫌って，⒇のように客観的な類似性だけに頼った解釈を要求するメタフ

ァをつくるとしたら，それはもはやメタファではなく単なる比較の文になってしまうだろう。

⑳ Herod is a fox.

a．Herod has red color (like a fox).

b．Herod has whiskers (like a fox).

c．Herod is hairy (like a fox).

第二の問題点は，類似性の確定の仕方に関してである。類似性の確定は，広く主張されているように，主語と述語をそれぞれ照合することによってなされるというよりも，むしろ，主語の指示対象に属している特性，形態，機能，目的等の種々雑多な諸要素のどれに焦点を当てるかによって成立するように思われる。主語の指示対象の顕著さの認定が，述語の特性を決定するのであるから，その過程を通して選ばれる類似性は，任意的なものと言わざるを得ない。

例えば，⒅で，類似点として〔Slyness〕が選ばれたのは，主語 Herod の属性のうち，彼のずるさに焦点が当てられたからに他ならない。仮に彼の臆病さに焦点が当てられるならば，類似点は〔Cowardice〕ということになり，それを含意することによって，⒅が形づくられるはずである。

第三の問題点は，新しい類似性の創造というが，二つの言語要素間（主語と述語というような）の相互作用を通して創造されるというよりは，それらとは別に，あらかじめ当の類似点が提示されたり含意されたりして，それに二つの言語要素が結び付けられるというのが事の真相であるように思われる。㉑の談話を見てみよう。

㉑ The Lord is my shepherd; I have evreything I need. He lets me rest in fields of green grass and lends me to quiet pools of fresh water. He gives me new strength. He guides me in the right paths, as he promised. Even if I go through the deepst darkness, I will not be afraid, Lord for you are with me. (Psalms 23)

メタファ "The Lord is my shepherd" が冒頭にある。次いで，主語 "the Lord" がなぜ述語 "my shepherd" であるのか，換言すれば，"the Lord" と "my shepherd" の類似点は何であるのかが，以下の談話の中で列挙されている。これは「必要とするものを何でも与えてくれる」こと，「豊かで安全な場所に導いてくれる」こと，「新しい力を与えてくれる」こと，「正しい道を示してくれる」こと，「いつも共にいてくれる」ことなどである。それらの類似点が，shepherd が自分の sheep にする行為と the Lord が his people にする行為との並行性に気づかせる役目を果すのである。すなわち，主語と述語が相互に作用し合うことで類似性が産出されるのではなくて，類似性が提示されることによって，両者の結び付きが意識されるのである。

意味素性の指定の任意性，類似性の確定の仕方の恣意性，類似性の言語要素からの独立性などの理由から，類似性による説明は，メタファの特徴の一端は垣間見させてくれるが，本質全体を把握させる説得力を欠いているのである。

1－3．発話の原則による説明と問題点

発話行為 (Speech Act) 理論に基づくメタファの説明も，幾人かの研究者によって提出されている。

Searle (1979) は，意味を二つのタイプに分類する。一つは語もしくは文の意味 (word, or sentence meaning) と呼ばれ，語や文が意味するものである。もう一つは話者の発話の意味 (speaker's utterance meaning) で，話者が語や文を発話することによって意味するものである。そして，メタファの意味は，常に，発話の意味であると主張している。

Searle の説明原理に従うと，(22)のメタファ文は，以下に示すような形で解釈される。

(22) (＝ Searle's (6))

Richard is a gorilla.

(22)は(23)のような意味である。

(23) Richard is fierce, nasty, prone to violence, and so forth.

(22)の聴者は(23)を推論するわけであるが，それは(24)のような信念 (belief) に依拠して行なわれる。

(24) Gorillas are fierce, nasty, prone to violence, and so forth.

この信念と(22)とが，比較の操作を受けて，(25)の推論を正当なものとするのである。

(25) Richard and gorillas are similar in several respects; viz, they are fierce, nasty, prone to violence, and so forth.

Searle 流のメタファの分析は，結局，類似性による解釈に主要な焦点を置いていることがわかるが，その解釈を支えているのは，話者と聴者の間でなされる推論なのである。メタファは会話の中に埋め込まれ，会話の参加者間で一定の推論が遂行されるとき，はじめて実効力を発起できるわけである。

会話の中で遂行される推論，すなわち，会話の含意 (conversational implicature) を積極的に出している論に，Lyons (1981) がある。彼は Grice の協調性の原理 (cooperation principle) を用いて，メタファを解釈している。

(26) John is a tiger.

まず，(26)が提示される。この文に協調性の原理が働くのであるが，協調性の原理は，メタファの解釈へと聴者を直接導くものではなくて，探求それ自体を動機づける働きをする。

聴者は(26)を字義通りには意味づけることができない。John は人間であって，トラではないからである。しかし，話者が非協調的であると信じる根拠はない。話者の発話は陳述の形をとっており，彼は聴者に何かを語ろうとしているのに違いない。それはおそらく，話者と聴者にとって，個人的な信念とか世界についての仮定などに照らして，容易に理解されるものなのだろう。話者は，協調的であるなら，聴者が字義通りではない意味を，発話されたものの全体，もしくはその構成要素の一つないしは二つ以上の字義通りの意味に基づいて解釈できると信じていなければな

らない。実際に語られたこと以外の何かを伝えるために言語を用いる一つの方法は，メタファである。それならば，(26)がメタファとして解釈できるかどうか調べてみよう。

こうした過程を経て，メタファの解釈が着手されるのである。

以上の説明から，発話の意味とか字義通りではない意味をもつことが，メタファの本質的な特徴であるように思われる。しかしながら，発話行為や会話の含意による説明には，いくつかの問題点が見出される。

第一に，発話の意味や字義通りではない意味は，メタファの書き換え可能性を前提にして成立する性質のものであるが，そのような可能性は，ア・プリオリに存在していない。なるほど，ゴリラは狂暴で不潔で暴力的であるかもしれないが，それらは一つの見方であって，絶対的な特性ないし評価基準ではない。(24)のような信念の背後にはかならずといっていいくらい，無数の別の信念が存在しているのである。

第二に，発話の意味は，文の意味を引き金として生じる言語外の意図，行為，知識等の，広い意味でのコンテクストに還元されてしまう。発話の意味は，然るべきコンテクストで一定の意味内容を備えた文を発するときに，その実体を顕わにするものであり，全くのコンテクスト依存の意味なのである。

次の文を見てみよう。

(27) It is cold in this room.

(27)の字義通りの意味は明らかである。けれども，この文は，使用されるコンテクストに応じて，単に部屋の気温の状態を描写するにとどまらず，(28)を意味する場合もある。

(28) a．Please shut the window.

b．May I shut the window ?

c．Turn on the heater.

(27)が(28)を含意するには，話者が寒いと感じていること，窓が開いていること，話者か聴者が寒さの原因を除去できる立場にいること，話者がその原因を取り除いて欲しいと思っていることが，発話のコンテクストの条件として備わっていなければならない。そうでなければ，(27)を発すること自体，的はずれな行為になってしまうだろう。

他方，聴者も話者と同じコンテクストを共有しており，話者の伝えようとしている意図や要求を理解している必要がある。そうでないと，(29)のような不誠実な応答をしてしまう危険性が出てくる。

(29) a、Oh, yes, it is.

b．No, it isn't very cold here, I think.

メタファが発話の意味であるならば，今観察した例と同様に，メタファは専ら使用の領域に属していることになる。然るべきコンテクストがあらかじめ準備され，その中で発話がなされるこ

とによって，文はメタファに変貌するのである。しかし，メタファの意味を構築するコンテクストの諸要素は，あるものは話者の意図の内に潜み，あるものは言語外の状況の中に遍在し，又あるものは聴者の理解力に依拠するといった，不定形のはっきりした実体のない性質のものである。そうであるなら，メタファの意味も，実体性の希薄な，時として非常に気粉れなものということになってしまうだろう。

メタファを言語使用の枠内で扱うことは，メタファを単なる文の使用の一つのタイプの位置に貶めてしまうのである。

第三に，特殊な問題であるが，メタファと話法の関係があげられる。

(30) a. The boy next door is a ball of fire.

b. Tom said that the boy next door was a ball of fire.

(Cohen (1979：65))

(30b) は (30a) のメタファを that 節に埋め込んだ間接話法の文である。Cohen (1979) によると，(30a) の Tom の記述も，(30b) のそれについての話者の報告も，メタファの解釈には影響を与えない。

ところが，発話行為では，そうはいかない。

(31) a. I am sorry. (Tom's word)

b. Tom said that he was sorry.

(31a) は確かに Tom 自身の弁明となるが，(31b) は話者の弁明にはならず，相変わらず，Tom の弁明なのである。この事実は，メタファの意味が発話の意味ではなく，文の意味であることを示している。

以上の問題点を克服しないかぎり，メタファを発話の原則の中だけで説明しようとすることには，無理がある。

1－4．意味の拡張による説明と問題点

メタファの斬新性に注目した理論がある。生きたメタファというのは，常套表現と違って，創造的であり，それゆえ，一回限りの新奇さを印象づける表現であるはずである。そこには，ア・プリオリな類似性とか対応する意味のような夾雑物はない。

Richards (1936) 以来，メタファの構成物を趣意語 (tenor) /媒介語 (vehicle) とか，焦点 (focus) /枠 (frame) のように，二つに分割し，両者が相互に作用し合って，新たに観念ないし思考が産み出されるという議論がなされている。これは，いわゆる相互作用説 (interaction theory) で，Black (1962, 1979) がその理論の中心人物である。

(32) Scrooge is a pig.

Black によれば，(32) では "a pig" が焦点になり，残りの部分は枠を構成する。ここで焦点に注

目すると，“a pig” は媒介語の役割を演じ，それによって喚起される様々な連想（どん欲さ，不潔さ，不格好さなど）が，このメタファの趣意となる。そして，特定の連想もしくは連想の束が Scrooge に転移するのである。

“pig” という語が本来の意味を離れて，それに結びついた連想をメタファの中で新たに意味として浮び上がらせるというのは，一種の意味の拡張である。(32)を言うことで(33)の意味が意図されたとしたならば，それは “pig” の本来の意味に〔greedy〕という意味が新たに付け加えられたということなのである。

(33) Scrooge is greedy.

ここで注意したいのは，なるほど，(32)は(33)を産み出すとしても，“pig” の本来の意味は尚も生き続けているのである。つまり，既成の言語コードに基づく解釈(32)と，このコードを超えたメッセージの要請するコードの修正(33)が，緊張関係をつくることを通して，重層的な意味作用が醸し出されるわけである。

池上(1984)，Kittay (1981)，リクール(1984)は，メタファにおける共通性（同一性）と対立（差異）に，その本質を見ている。

(34) a．新しい意味作用を生み出すきっかけとなるのは新しい「対立」の関係を創り出すということである。(池上(1984：202))

b．言述の文彩である隠喩は，同一と差異の間の葛藤をを用いて，同一の中に差異を融合させることにより意味論的領域を隠れた仕方でうみだす過程を，明らさまに提示する。(リクール(1984：249))

c．a metaphor remains a live (and lively) metaphor as long as the domains of the two fields employed in the metaphor are structured differently in some significant manner. (Kittay (1981：56))

(34)の考え方に従うと，既成の意味は残存しつつも，共通性（同一性）と対立（差異）の「直接的な統覚」によって，かって帯びたことのない意味が突然識別されるのである。メタファ論でたびたび言及される類似性は，メタファの原因や根拠であるより，むしろ，この意味の出現の結果なのである。

では，いかにして，意味の革新により得られた意味を特定化していくであろうか。

菅野(1985)は，メタファの解釈を「有意性を欠く陳述にそれを付与する過程」であると規定している。そうするためには，話者/聴者はメタファが語られるたびごとに，目的に適う意味を手に入れるために，必要な「演繹前提」を自ら設けなければならない。そこで導入される道具は，「有意性の公理 (principle of relevance)」と「呼び起こし (evocation)」である。

有意性の公理とは，「陳述の意味と聞き手が記憶中に有する命題の集合との関係」である。陳述が与えられると，それが最大の有意性をもつように検索される。検索によって有意性が確定で

きない場合は，呼び起こしに訴える。呼び起こしの助けをかりて，一般的な共有知識では割り出せなかった新たな意味を検出することになる。

有意性の公理と呼び起こしによるメタファの説明は，相互作用説と発話の原則の折衷案のようにみえる。発話の原則（有意性の公理）でとらえられない部分を相互作用説（呼び起こし）で補おうというのである。

意味の拡張理論の問題点は，メタファの解釈を目ざす説明原理の限界を如述に示している。

(32)のメタファを再びとりあげて，この点を明らかにすることから始めてみよう。

(32) Scrooge is a pig.

語 "pig" の包含する連想は，社会的なレベルから個人的なレベルに至るまで，おそらく無数に存在しているであろう。"pig" が喚起するであろう数多くの連想の中から，(32)にふさわしいものを特定する原則は，何なのであろうか。話者と聴者の共有知識や状況，意図，感情，態度などの総体をあげることができるかもしれない。もちろん，それらの "pig" に対する言語外の要因も重要であるが，そればかりではなく，Scrooge と指示された人物の目立った性質，特徴，ふるまい，話者/聴者の評価なども，強く介入してくるはずである。かえって，後者のうちのどれか一つ，あるいは二つ以上の要素が話者/聴者に特定されて，述語の連想も指定されると考えるのが自然であるように思われる。

意味の拡張は，媒介たる述語ではなく主語が直接の引き金になるとしても，拡張された意味は，話者の解釈説明か聴者の推論説明の助けがなければ，依然として正体不明なのである。その意味で，類似は，リクール(1984：237)の述べるように，「言表の原因や理由であるより，むしろ結果」なのである。

メタファが発せられる現場では，新しく発生しているはずの意味がとらえられないとするならば，メタファは，話者が何かに注意を向けさせる機能を担っているとしか言えないのではないだろうか。(32)を語ることで，(35)のような内容に注意を促すという風にである。

(35) a. Look, Scrooge is certainly greedy.

b. You know, Scrooge is surely filthy.

c. Look there! How awkward Scrooge is!

メタファに用いられる語は "pig" のように連想の呼び起こしが限度を知らず押し進められるものばかりではない。反対に，そのような連想の呼び起こしの難しい例もある。

(36) a. Scrooge is an X−bar theory.

b. Scrooge is a neutron.

c. Scrooge is an omega.

(36)の各文は，Scrooge と普通名詞との意外な出会いを展開しているが，斬新な意味は不透明である。それは，述語名詞が連想を呼び起こしにくいために，殊更に，文の直載的な解釈を別個に

要求するからである。

何かについて語っているメタファの，当の何かの正体が判然としないならば，驚かせたり，強烈な印象を与えたり，注意を喚起させる以外の機能をメタファはもっていないということになってしまう。意味の拡張理論は，メタファの斬新さを視座に収めようとした点で評価できるが，結局のところ，メタファを間投詞と同じレベルにせざるを得ないような方向へ導いてしまうのである。すなわち，メタファを発することで注意を引きつけ，その後で，真に理解可能な内容を語るか含意するかするのである。意味の拡張は，常に，メタファの外にあるというわけである。

1－5．まとめ

四つの主な理論を概説し，各々のかかえる問題点を洗い出してきたが，それらには共通した基盤がある。それは，メタファの構造そのものに探求の目を向けずにメタファの解釈に立ち入ってしまっている，ということである。

メタファの解釈は，アド・ホックなコンテクストの要因，社会的コンセンサス，心理的メカニズムなど，人間の内部と外部に関係づけられた実に複雑多岐に亘る要素に結びついている。したがって，解釈を支配する原則を一般化したり，規則を定式化したりする作業は，大いなる錯覚か大いなる偽瞞へ至らせる。そうでなければ，袋小路に迷い込んで脱出できないという惨状を呈することになる。

メタファは，言語表現である。「言語」表現である限り，それは言語要素から成り立っている。それならば，メタファを所与のものとして受け入れて，それを構成する言語要素の特性と機能を観察し，それらを支配している原則及び構造を明らかにすることが，少なくとも言語学的なメタファの研究なのではないだろうか。従来出発点と見なしていた事柄を到達点に据え，メタファの言語学的特徴と機能，それに根底にあると推測される認識構造を，言語学的に考察することが，本研究の主な目的なのである。この考察によってもたらされた出力をもとにして可能となる解釈は，哲学や心理学，修辞学や文学などの精力的な諸学科に全面的に委ねることにする。

メタファには，次の三つのタイプがある。

(37) a．名詞的メタファ (nominal metaphors)

b．叙述的メタファ (predicative metaphors)

c．文メタファ (sentential metaphors)　(Miller (1979：233))

対応する例は，(38)である。

(38) a．The Lord is a refuge for the oppressed. (Psalms 9)

b．They plowed fields of evil. (Job 4：8)

c．Dan will be a snake at the side of the road, a poisonous snake beside the path, that

strikes at the horse's heel, so that rider is thrown off backward. (Genesis 49：17)

(38a)は名詞的メタファで，繫辞のbe動詞に連絡した二つの名詞からなる。普通，述語がメタファの中心的役割を演じる。(38b)では動詞句にメタファの焦点が置かれる。名詞的メタファ以外の文レベルのメタファを叙述的メタファと覚えておくのがよいだろう。(38c)は談話レベルのメタファで，ある文が他の文との相対的な関係によってメタファとして機能している。それゆえ，(38c)の後半の部分を談話から切り離して提示することも可能であるが，その場合には，それが字義通りの意味の文であるのかメタファの文であるのかがあいまいになる。

(39) A poisonous snake strikes at the horse's heel, so that the rider is thrown off backward.

このようなメタファを文メタファという。

以下では，名詞的メタファ，叙述的メタファ，文メタファの順で，各項目ごとに具体的な分析がなされていくことになる[3]。

2．名詞的メタファ

名詞的メタファとは，be動詞をはさんで，二つの名詞句（主語名詞句と述語名詞句）の現われるメタファ文をいう。主語名詞句をx，述語名詞句をyという変項で，又，be動詞をBEという定項でそれぞれ表記すると，名詞的メタファの基本形は，次のようになる。

(40) x BE y　　Condition; $x \neq y$[4]

(40)に付された条件は，次のことを意味している。もし$x = y$が成立するならば，(41)のような文も，条件が整いさえすれば，メタファとして認めなければならなくなる。

(41) a．The worm is a worm.[5]

b．A guy is a guy.

c．Plato is Plato.

これらの文は，協調性の原則とか有意性の公理といった，いわゆる談話の効力を介して何らかの意味解釈が可能であろうが，どのようなコンテクストを与えたとしても，けしてメタファにはならない類の文である。[6]

2－1－1．主語名詞句の特性

主語の位置にたつ名詞句の特性から観察してみよう。分析の便宜さという理由から，述語名詞句yの値を固定し，xを色々な名詞句で置き換えて，メタファとしての容認性を測定することにする。

(42) a．Margaret Thacher is a cat.

b．The Prime Minister of England is a cat.

c．That woman over there is a cat.

d．The woman drinking beer is a cat.

e．His wife is a cat.

f．?A certain womn is a cat.

g．#Some woman is a cat.[7)]

述語名詞句内の "cat"は，慣用的含意 "cross, jealous, nimble, snug" などをもつ名詞であり，この語を含むことで成立するメタファは「生きたメタファ (living metaphors)」ではなく，「陳腐なメタファ (commonplace metaphors)」あるいは「死んだメタファ (dead metaphors)」である。この種のメタファを用いた理由は，メタファの伝える意味を透明にすることで，主語名詞句の特性をきわだたせられるからである。但し，先述した "cat" の含意のうち，(42)の各文はどれを選択しているかは，言及しない。

(42)の文は，指示性の高いものから低いものへと順に配置してある。ここで，ある名詞句が指示的に用いられるというのは，このような表現の指示の範囲全体について，語る主体である我々が，語用論上の知識をもっているということを意味している。この知識を使って，主語名詞句の指示対象を指定することができるのである。[8)]

(42a) は主語に固有名詞の現われた例である。固有名詞は通常，唯一指示対象 (unique reference) をもつ名称であるから，人名 "Magaret Thacher" の指す対象は直接的な仕方で特定できる。

(42b) では "the Prime Minister of England" という普通名詞 "prime minister" と固有名詞 "England" の組み合せからなる名詞句が存在している。普通名詞だけでは同一種属（クラス）の構成員であることしか示せないのに比べ，固有名詞の限定によって，"the Prime Minister of England" は，(42a) の固有名詞と類似した機能，すなわち，あるものを同じクラスの他のものから区別する機能を遂行できるのである。

(43) a．the Prime Minister of England

b．the Prime Minister of Japan

c．the Prime Minister of Germany

d．the Prime Minister of France

但し，固有名詞は常に固定的，絶対的で，それ自体で指示を決定できるのに対し，普通名詞の限定用法は，(43)からわかるとおり，流動的，相対的であって，他の何かと引き当てられることで，その指示性を獲得するのである。

(42c) の "that woman over there" は，当該の指示対象を指さす，あるいはそれと似た動作を随伴させることを要求するような，直示的な (ostensive) 名詞句である。話者と聴者は，指示対象の存在する領域，もしくは，指示対象に直接に指示できる領域の中に場所を占めていることが必然的に含意されるのである。したがって，

(44) # That woman over there is a cat. But I can't see her anywhere now.

は，語用論上，矛盾した談話であると言わざるを得ない。

(42d) の主語は，(42b) と (42c) の機能を合せもっている。それは "woman" で表わせるクラスの構成員を "drinking beer" という動作を描写する句で限定しているという点で (42b) に共通しているし，他方，限定の機能を果している句が現在時を指示するというところで，(42c) と同様に直示性 (ostensibility) を担っているからである。この句は，例えば，tavern にいる複数の woman から，一人の特定の woman を指示する場合に用いられる。

(45) a. the woman drinking beer

b. the woman eating beef sandwich

c. the woman dancing with Robert

d. the woman crying alone

(42e) の "his wife" は，所有格代名詞を含む例であるが，同一指示性 (coreferentiality) と密接な関係をもっている。同一指示関係は言語表現の領域内で成立する現象であるから，言語表現と言語外の現実世界との間に生じる指示関係とは区別しなければならない。(42e) は，その前に次の文を先行させて，一つの談話を構成していると仮定することができる。

(46) John$_i$ is an honest man. But his$_i$ wife is a cat.

(46) で，インデックスを付した "John" と "his" は前方照応関係にある。所有格代名詞 "his" は固有名詞 "John" を談話内で指示しているのである。そして，この "John" は，(42a) の説明で述べたように，直接的に指示対象を特定する。(42e) は，いわば，二段構えで指示対象を志向するのである。

所有格代名詞の指示は，同一談話内での言語照応 (endophoric) 関係だけでなく，言語外の対象との間で結ばれる言語外照応 (exophoric) 関係によっても，その任務を行使できる。

(47) (pointing to a man standing on the corner) His wife is a cat!

いずれにしても，所有格代名詞に限定される名詞句は，それを介して，もっと言うなら，それの指示する対象の存在を前提にしてはじめて，名詞句全体の指示する対象の存在が保証される点で，間接的な指示性をもつということができる。(42e) について言えば，"his" の指示する対象が決まって，"his wife" の指示性が確定するのである。その意味で (42a–d) の主語名詞句に比較して，(42e) のは指示性が弱いといえる。

さらに指示性の弱い名詞句として，(42f) と (42g) をあげることばできる。両者の違いは，"a certain woman" が実際にはその女性を知っているが何らかの理由でわざと名前なり正体なりを隠しているという含みがあるのに対して，"some woman" にはそのような含みがなく，余程のコンテクストを用意してあげなければ，指示性をもつことができないという所にある。したがって，(48a) は談話の首尾一貫性に照らして容認できるが，(48b) はそれが難しい。

(48) a．A certain woman, in fact, I do know who she is, is a cat.

b．#Some woman, in fact, I do know who she is, is a cat.

しかも，メタファとしても(48a)は(42f)よりも容認性が高くなるが，(48b)は(42g)と同じで，やはり容認性は低い。(42f)が(48a)よりもメタファとして受け入れ難いのは，メタファの主語は，特にそれについてメタファとして叙述される場合には，指示性が明示されていなければならないからである。(42f)は，指示対象は暗示しているが，手がかりがさらに付け加わらなければ，はっきりとは認知できないだろう。(48a)では，依然として婉曲的な表現ではあるが，指示対象の存在についての情報がある分だけ，明示度が高くなっているのである。

一方，(42g)の主語には指示性はなく，(48b)のように新たに指示の明示度を増やす情報を付加するのは，論理の矛盾に陥ってしまうことになるのである。

以上，主語名詞句の指示性に焦点を当てた観察から，暫定的に，メタファの成立条件として，次の原則をたてることができる。

(49) 名詞的メタファ成立のための主語名詞句に関する一般原則（試案）：

名詞的メタファが成立するためには，主語名詞句は指示対象をもち，かつ，その指示性は直接的・明示的でなければならない。

原則(49)は，今までに出てきたデータをすべて説明できるが，しかし，それに対しては二つの反例があるように思われる。

第一の反例は，主語名詞句が指示対象を唯一に指定できないにもかかわらず，メタファ文を成立させている場合である。これは，さらに，主語が総称的なものと，数量詞(quantifiers)を含むものとに下位区分できる。

前者から見ていく。

(50) a．A woman is a cat.

b．Women are cats.

上記の文の主語は，特定の指示対象をもたず，総称的に用いられている。この用法は，非メタファ文でもごく普通に見られる。

(51) a．A whale is a mammal.

b．Germans are good musicians.

c．A bicycle is a vehicle with two wheels mounted in tandem on a light metal frame.

(51a)は，“whale”の表示するクラス全体が“mammal”の表示するクラスに属することを述べている。(51b)は，無冠詞の複数形の例で，“Germans”の表示するクラス全体が“good musicians”のクラスと等価であることを示している。(11c)は“bicycle”の指示物を定義した文であるが，(11b)と同様に，主語のクラスと述語のクラスの等価性を陳述している。三つの文に共通していることは，それぞれのクラスの個々の構成員に対する特定の指示にはいっさい言及していないと

いうことである。

(50)の文が(51)と同じく総称的に用いられており，しかも，メタファの実現に成功しているとするならば，いったい何がそれを可能にしているのだろうか。

一つの試みとして，主語の位置に〔＋ Human〕以外の名詞を代置してみよう。

(52) a．＃A dog is a cat.

b．＃Chimpanzees are cats.

c．＃A statue is a cat.

(52a–b)では，〔＋ Animate〕の名詞を，(52c)では〔－ Animate〕の名詞を各々代入したが，余程の道具立てを施してあげないかぎり，これらの文のメタファとしての容認性は低いであろう。

代りに，〔＋ Human〕の名詞を入れると，メタファとしての容認性は高くなる。

(53) a．? A person loving a dog is a cat.

b．? Persons taming chimpanzees are cats.

c．? A person carving a statue is a cat.

これは，日本語の「～のような人は～だ」型の，ある特定の行動・愛着・職業等で限定された人物に対する，語る主体の側の態度・評価・判定を表わしている。したがって，(50a)にもっと語る主体の姿勢をあからさまにした彩色を施すならば，メタファの存立基盤は一層確かなものとなる。

(54) a．I believe that a woman is a cat.

b．A woman, even if all people disagree with it, is a cat.

c．I hate a woman. For a woman is a cat.

反対に，(54)のコンテクストに，語る主体の側に感情的に引き寄せられ難いと思われる(52)のような名詞をあてはめると，やはりメタファとしての容認性の低い文ができてしまう。

(55) a．＃I believe that a dog is a cat.

b．＃Chimpazees, even if all people disagree with it, are cats.

c．＃I hate a statue. For a statue is a cat.

(55)のような文を言明するということは，己れの精神状態の異状さを表明することにほかならない。「ああ，そうですか。」とは簡単に首肯できかねる文なのである。

語る主体の側に感情的に引き寄せられ易い，言い換えるなら，感情移入の容易な名詞は，なにも〔＋ Human〕の名詞に限らない。語る主体と名詞の表示する対象との心理的距離が近いか，語る主体の関心の領域にそれが包含されていればよい。

(56) a．I believe that a statue of a woman is a cat.

b．A puppy, even if all people disagree with it, is a cat.

c．I hate chimpanzees. For bloody chimpanzees are cats.

"a statue of a woman", "a puppy", "bloody chimpanzees" は〔＋ Human〕ではないが，語る主体の各主語に対する態度や評価の色合いが濃い。

こうした「感情移入のし易さ」は，段階的な程度問題であるよりは，感情し易いか中立であるかの二者択一であるようにみえる。そして，主語名詞句の総称的用法では，後者の方が無標で，前者の方が有標なのである。語る主体の側に引き寄せられ易いのは，同じ生活世界を共有している〔＋Human〕の名詞か，それに準じ，かつ，語る主体の主観性を印している名詞に限られる。

したがって，"snake" のような，語る主体に対して中立的な名詞に，感情移入をもたせるには，一定の操作を介入させなければならない。

(57) a．#A snake is a cat.

b．?A snake is like a cat.

c．A snake is guileful like a cat.

"a snake" はメタファの主語にはなり難いが，(57b) のように覆われたシミリ (covert similes) では容認性が高くなり，(57c) の顕わなシミリ (overt similes) では適切な文をつくりあげることができる。これは，メタファとシミリの機能上の相違に要因があるが，それについては，ここでは言及しない。

さて，次に，数量詞を含む場合に目を転じてみよう。

(58) a．All Frenchwomen are cats.

b．Every Frenchwoman is a cat.

c．Each Frenchwoman is a cat.

(58a) は主語に "all" を有し，"Frenchwomen" の表示するクラス全体に焦点を当てている。一方，(58b–c) では，クラスに属する個々の構成員に力点を置きながら，それらが構成しているクラス全体を話題にする。どちらにしても，そのクラスの特定の構成員にではなく，すべての構成員，もしくは，任意の構成員のどれかに言及しているという点で，(50)であげた総称文と軌を一にしている。それは，"without exception" のような，総称性を強調する副詞句を挿入することで，一層明確なものとなる。

(59) a．All Frenchwomen, without exception, are cats.

b．Every Frenchwoman, without exception, is a cat.

c．Each Frenchwoman, without exception, is a cat.

(51)と同様に，非メタファ文でも数量詞を含む用法は普通に観察できる。

(60) a．All whales are mammals.

b．Every German is a good musician.

c．Each bicycle is a vehicle with two wheels mounted in tandem on a light metal frame.

また，〔＋ Human〕以外の名詞を主語に入れると，メタファとしては受け入れ難い文を産出し

てしまう。

(61) a. #All dogs are cats.

b. #Every chimpanzee is a cat.

c. #Each statue is a cat.

代りに，〔＋ Human〕の名詞を置くと，メタファとしての容認性が高くなる。

(62) a. ? All persons loving a dog are cats.

b. ? Every person taming chimpanzees is a cat.

c. ? Each person carving a statue is a cat.

さらに感情移入の顕著な名詞であれば，たとえそれが〔－ Human〕の名詞であっても，メタファ文をつくることができる。

(63) a. All statues of women are cats.

b. Every puppy is a cat.

c. Each bloody chimpanzee is a cat.

こうした事実から，クラス全体を表示する数量詞付きの名詞句も，語る主体の側の心理的領域内に包摂されていれば，特定の指示をもってなくても，メタファ文を産出できる。一方，その名詞句が語る主体に対して中立である場合には，メタファとしての容認性が著しく低くなるのである。

では，なぜ，総称的用法の主語名詞句でも，語る主体の感情移入が容易であれば，メタファ文を成立させられるのだろうか。

Jackendoff (1983：139) は，語の意味を説明する陳述の中で，次のように語っている。

(64) A word meaning, then, is a large heterogeneous collection of such conditions dealing with form, function, purpose, personality, or whatever else is salient.

「顕著な (salient)」ものとは，もちろん，語る主体，ないしは語る主体の集団にとっての相対的な物差しである。例えば，虎の縞のある特性とか，人間の二本足である特徴とか，ゲームでの競争のように，人々が重要であると見なすようなすべての条件を語の意味に含み入れることができるのである。これらのものを，Jackendoff は「典型性の条件 (typicality conditions)」として特徴づけることができると考えている。

語の意味の典型性がさらにきわだたせられていくと，もっとも典型的な特徴だけが最大公約数的に集められ，他のあまり典型的でない特徴は捨象されていく。こうした過程を経て，語の指示する特性/対象物が分類されると，プロトタイプ (prototype) が問題になる。

Johnson and Lakoff (1980：71) や Givón (1984：17) らは，メタファとの関連で，プロトタイプについて論じている。

(65) a. The most prototypical member of a category, i.e. the one displaying the greatest number

of the most important characterstic properties/features, presumably defined our notion of "the prototype". (Givón (1984：17))

b. ...people categorize objects, not in set–theoretical terms, but in terms of prototypes and family resemblances. (Johnson and Lakoff (1980：71))

例えば，空を飛び，かつ，さえずるという特性をもつ鳥（すずめ，こまどり，うぐいすなど）は，プロトタイプを構成する鳥である。他方，ニワトリ，ダチョウ，ペンギンは生物学上鳥であることに間違いはないが，「鳥」というクラスの中心メンバーではなく，非プロトタイプ(non-prototypical)の鳥である。約言すれば，「鳥」という語は，典型的に，飛翔性やさえずり性を意味の一部に組み入れており，この特徴に従って，「鳥」の指示する対象が現実には存在しないにしても，原型としてイメージ化されるのである。そして，イメージ化された原型に，他のそれほど典型的ではないが，形，機能，目的，個性などを特徴づける特性が付け加わって，より現実に近い対象ができあがっていくのである。

プロトタイプは，特定の言語共同体に属し，ほぼ均質の生活世界を共有する構成員間で最大公約数的な形で成立する傾向にあるが，それに主観的な色合いが増加し加えられると，ステレオタイプ(stereotype)が出現する。ステレオタイプ化されたwomanは，生物学的，心理学的，社会学的等々の側面よりとらえられた客観的な特性を削ぎ落とされ，語る主体の個人的な経験とイメージに投射されたwomanに変質する。それは，共同体の成員に共有されることもあるが，元来，個人的色彩の強いものなのである。

ステレオタイプはプロトタイプより一段と典型化の進んだものであるが，Jackendoff (1983：28)のいう「映写された世界(projected world)」の中で構成されるのであろう。映写された世界とは，あるがままの現実世界(real world)とは違って，主体によって経験されたものとしての世界，精神を通じて無意識のうちに構成された世界の名称である。

この世界では，"woman"という語は，次のような特性を典型的にもつ。

(66) a. A woman is cross.

b. A woman is jealous.

c. A woman is nimble.

"woman"は(66)の三つの特性で完結しており，これら三つを合わせもったwomanが"woman"と呼ばれるにふさわしい指示対象なのである。それゆえ，"woman"がもっていると考えられる他の開かれた特性は，ステレオタイプ化されたwomanからみな排除される。

プロトタイプ化やステレオタイプ化の必要条件として，そのような過程を経る名詞は，クラス全体を表示しなければならないということをあげることができる。"bird"にしろ，"woman"にしろ，それが表示するクラス全体，そのクラスに所属するすべての構成員が余す所なくカバーできてはじめて，一定の特性の最大公約数がはじきだされるからである。但し，最大公約数の算定

の仕方は，プロトタイプ化では共同体の成員のコンセンサスに基礎をおき，ステレオタイプ化では各主体の主観性により傾きがちであるという違いはある。

もしクラス全体が表示されないと，メタファとしては成功しない文が生じてしまう。

(67) a．? Some of Frenchwomen are cats.

b．? A certain of Frenchwomen are cats.

c．? Several of Frenchwomen are cats.

(67)は，"some of" とか "a certain of" とか "several of" などの部分を表わす数量詞 (partitive quantifiers) を含んでいるが，メタファとしての容認性は低い。これらの主語名詞句は，特定の対象を指示しないという点では総称的であるが，クラス全体の中の一部の下位クラスを指定する点では，相対的にではあるが，指示性を帯びることになる。

主語名詞句の指示性を少しぼかした表現をとると，メタファとしての容認性は著しく低くなる。

(68) a．#Some of Frenchwomen, unknown to us, are cats.

b．#A certain of Frenchwomen, unknown to us, are cats.

c．#Several of Frenchwomen, unknown to us, are cats.

反対に，数量詞によって限定された名詞句の指示性を明確にすると，容認可能なメタファ文になる。

(69) a．As far as I know, some of Frenchwomen are cats.

b．I made the aquaintance of various Frenchwomen, a certain of them are cats.

c．Several of Frenchwomen are surely cats.

(67)と(68)は，数量詞で限定された下位クラスの他に，クラス全体の残りの部分をも考慮に入れなければならないので，ステレオタイプ化もできなければ指示の特定化もできず，結局，メタファにはならないという結果に至る。一方，(69)のように，特定の指示対象がほのめかされている場合には，焦点の当たるのは下位クラスだけであり，残りの部分は自動的に考慮からはずされるのである。

以上，主語名詞句が指示対象を唯一的に指定できない総称表現のメタファを見てきたわけだが，そのメタファの成立条件を，次のようにまとめることができる。

(70) a．主語名詞句がクラス全体を表示すること。

b．主語名詞句に対して語る主体が経験を通して容易に感情移入できること。

c．aとbに基づいて，主語名詞句の表示する対象をステレオタイプ化きること。

(70)の条件をすべて満たすときに，主語名詞句は形の上では総称表現として特定の指示対象をもっていないように見えるにもかかわらず，実際は，語る主体の映写された世界の中では，ステレオタイプ化された指示対象が存在するのである。

第二の原則(49)への反例は，現実世界には明らかに存在しないような対象に言及していて，しか

も，メタファとして成功している文である。

(71) a．The late John F. Kennedy is a cat.

b．The present king of France is a cat.

(71a)は，ある時代には確かに実在していたが，現在では故人になっている人物に言及している。(71b)は，指示と意味の関係でしばしば論じられてきた例である。

各主語名詞句は，言語外の世界に指示対象をもっていないようにみえる。けれども，言語レベルでは，命題の真偽値は別にして，有意味な文として，又，メタファとして，容認可能な文の条件を備えている。

(71a)には，いくつかの属性を付与することができる。

(71) a．John F. Kennedy was president of U. S. A.

b．John F. Kennedy was shot by Oswald.

c．John F. Kennedy had two brothers.

"John F. Kennedy" は固有で唯一的な存在者を志向し，複数の属性を既知の知識や情報を介して付与できるので，同定可能な指示対象である。それは，語る主体の映射された世界に，これこれの特徴，言動，行動などをもって存在するかのようにふるまうのである。

それに較べて，(71b)は異なる意味合いをもっている。(71b)は言語レベルでは有意味な文である。"the present king of France" で何を意味しているかを了解できるからである。しかし，この名詞句には，"John F. Kennedy" と同じ手順で属性を付与することはできない。現実世界に，これに関しての共有知識がないからである。したがって，もし(71b)がそれだけでメタファとして提示されたならば，不成功なメタファと判定されてしまうだろう。文としては有意味かもしれないが，メタファとしては無意味でなのである。

(71b)が有意味なメタファに変換されるためには，主語名詞句の指示対象に，語る主体が同定可能なイメージを映射できるように，属性を創り出して与えてあげる必要がある。

(73) a．The present king of France lives in Brazil.

b．The present king of France has a beauteful wife and two wise daughters.

c．The present king of France is bald.

首尾一貫した属性を the present king of France をめぐって創り出す操作を通して，その指示性を実現させるのである。このような属性の付与とそれに基づく指示対象の構築の後，(71b)はメタファであると判定可能になるのである。

二つの一見反例と思われる現象も，広い意味での指示性という面からとらえれば，原則(49)に修正を施すだけで，そのうちにとりこむことができる。最終的な改訂版を次に記す。

(74)　名詞的メタファ成立のための主語名詞句に関する一般原則（改訂版）：

名詞的メタファが成立するためには，主語名詞句は，少なくとも，語る主体によって投射された指示対象をもたなければならない。

2－1－2．述語名詞句の特性

名詞句メタファを構成する第二の要素は，述語名詞句である。ここでは，述語名詞句にのみ焦点を当てて，その特性を探っていく。

(75) a．I am a worm. (Psalms 22：6)

b．Christ was a chronometer. (Melville)

c．Our days on earth are a shadow. (Job 8：9)

(75)の述語はすべて不定冠詞付きの名詞句であり，指示性はもっていない。Jackendoff (1983：92, 94) は，このような名詞句を〔TYPE〕として位置づけ，「指示性の原則Ⅱ (Referentiality Principle Ⅱ)」の中で，〔TOKEN〕と対比させながら，次のように主張している。

(76) Referentiality Principle Ⅱ[9)]

Unless there is a linguistic marking to the contrary, all phrases that express〔TOKEN〕constituents are referential：phrases that express〔TYPE〕constituents are nonreferential.（下線は筆者による）

(76)に従うと(75)の述語名詞句が例外なく〔TYPE〕を構成し，非指示的 (nonreferential) ということになる。したがって，述語名詞句の指示性を強調すると，容認できない談話を生じさせてしまう。[10)]

(77) a．#I am a worm. The worm is in front of the tree.

b．#Christ was a chronometer. The chronometer belonged to Pilate.

c．#Our days on earth are a shadow. Incidetally, the shadow is getting thinner.

(77a) の第二番目の文の主語 "the worm" は，先行文の述語 "a worm" を指示している。同様に，(77b) では "the chronometer" が "a chronometer" を，(77c) では，"the shadow" が "a shadow" をそれぞれ指示している。これらの指示は，文法的には，前方照応性という正しい形をとっているが，文相互のつながりという首尾一貫性からは，退りぞけられる類のものである。

(78) a．She is beauty.

b．Lincoln was an American conscience.

c．The team is huge power.

(78)は，述語に抽象名詞のくるメタファである。これらの名詞は，もの (things) ではなく，性質 (properties) を表示しているように思われる。性質は指示物に内属し得るが，それ自身では指示性をもっていない。

(79) a．The Lord is my light (Psalms 27：27)

b．You are always my shield from danger. (Psalms 3：3)

c．The Lord is a refuge for the oppressed. (Psalms 9：9)

(79)の各文は，修飾句や限定詞付きの名詞句を述語に含んでいる。(79a)では所有代名詞の“my”を，(79b)で“my”と前置詞句“from danger”を，(79c)では前置詞句“for the oppressed”をもっている。しかし，それらの要素は，指示の効力を発起させるよりは，むしろ，修飾している名詞の内容を説明する役割を演じている。それで，(77)で行なったのと同じテストをすると，容認し難い談話を産出してしまう。

(80) a．#The Lord is my light and my salvation. Incidentally, the light is on wall.

b．#You are always my shield from danger. Incidentally, the shield belongs to Goliath.

c．#The Lord is a refuge for the oppressed. Incidentally, the refuge is almost broken through many wars.

メタファ文と非メタファ文との，述語に関する共有特性は，指示性のない名詞句をとり得るということである。けれども，両者を分かつ特徴も，確かに存在するのである。

(81) a．Clark Kent is a reporter.

b．Clark Kent is Superman.

c．Clark Kent is the man drinking a martini. (Jackendoff (1983：88))

上記の文は，非メタファ文である。(81a)は，(75)で提示した文と同じく，述語に指示性のない名詞句をとっている。他方，(81b–c)は，同定し検証する文であって，指示の効力を帯びた述語名詞句を置いている。これは，主語名詞句と述語名詞句とを入れ替えた文の適格性の違いからも傍証することができる。

(82) a．*A repoeter is Clark Kent.

b．Superman is Clark Kent.

c．The man drinking a martini is Clark Kent.

不定冠詞を伴った名詞は be 動詞の主語になりにくいといわれるが（斎藤 & 鈴木(1984：34)），指示性の有無に一部分は関連している。[11)]

非メタファ文の be 動詞の後では，指示性のない名詞句も指示性のある名詞句も共にたち得るが，メタファ文では指示性のある名詞句をとることができない。

(83) a．#Clark Kent is that dirty dog over there.

b．#Clark Kent is the electric light pole in front of the post office.

c．#Clark Kent is the snake crawling on that table.

文(83)は，“Clark Kent”が人の名前である限り，メタファとしての容認性は著しく低い。無論，述語名詞句の指示性を解除すれば，メタファとして適格な文が生成される。

(84) a．Clark Kent is a dirty dog.

b. Clark Kent is a high electric light pole.

c. Clark Kent is a snake crawling on a table.

メタファ文と非メタファ文の述語名詞句に於ける違いは，その指示性にあるように考えられる。それを念頭において，主語名詞句で考察したような一般原則を定式化すると，次のようになる。

(85) 名詞的メタファ成立のための述語名詞句に関する一般原則（試案）：

名詞的メタファが成立するためには，述語名詞句は指示対象をもってはならない。

原則(85)は，今まで提出された例をすべて説明するが，これに対しては三つの反例と思われる現象が存在する。

第一の反例は，定冠詞付きの述語名詞句をとるメタファである。

(86) a. I am the bread of life. (John 6：35)

b. He is the head of his body. (Colossians 1：18)

c. America is the cream on top of the big musical pie. (Mosdell (1984：20))

定冠詞は，Quirk et al (1985：265, 266) によると，「話し手と聞き手とで共有されている文脈上の知識や一般的な知識に基づいて，唯一的に同定できるようなものを指示する場合」に用いられる。定冠詞付きの名詞句は，明らかに，指示性をもつということになる。

ところが，我々の常識は，「生命のパン」という特別のパンが店頭で売られていそうにないことを知っているし，この世界が「自分の身体の頭」がその頭を所有している人と同一であるような錯索した世界ではないと確信しているし，「巨大な音楽製のパイのてっぺんにあるクリーム」をなめることはけしてでないことを十分にわきまえているのである。

(86)の述語に付された定冠詞は，実は，文脈上の指示と関係しているのであって，語と世界内の対象との指示に関係しているのではないのである。

Quirk et al. (1985) は，指示をいくつかのタイプに分類した中で，談話内の指示として後方照応指示 (cataphoric reference) をあげている。その説明によると，定冠詞の後方照応指示というのは，主要名詞 (head noun) に後続するものが指示を唯一的に特定できるような用法である。定冠詞のこのような用法は，名詞句の修飾が名詞の指示を制約する場合に限られる。

(87) a. The President of Mexico is to visit China.

b. The girls sitting over there are my cousins.

c. The wines that France produces are among the best in the world.

(Quirk et al. (1985：268))

(87a) の "the President" は後続の "of Mexico" に修飾されることによって，指示の特定化を被っている。同様に，(87b) の "the girls" は "sitting over there" に，(87c) の "the wines" は "that France produces" に，それぞれ指示の特定化をあおいである。後続の句や節によって "the" の存在とそれの指示性が保証されているとしたならば，それはきわめて談話上の現象である。

先に少し触れたように，(86)であげたメタファの述語名詞句の定冠詞も，(87)の主語名詞句の定冠詞と並行したふるまいをしているのである。したがって，(86a)の "the bread" は "of life" に，(86b)の "the head" は "of body" に，(86c)の "the cream" は "on top of the musical pie" に修飾・限定されたことで定冠詞を得るに至ったということなのである。ここで注意したいのは，後方照応指示は談話上の要請であって，当該の名詞句と言語外の指示対象との間に成立する関係ではないのである。それだから，指示対象の存在を明示する談話は，不適格の標示を受ける。

(88) a．#I am the bread of life. Incidentally, the bread of life is on the shelf.

b．#He is the head of his body. Incidentally, the head of his body weighs at ten pounds.

c．#America is the cream on top of the big musical pie. Incidentally, the cream sold a million pounds yesterday.

原則(85)の反例と思われる(86)のようなメタファの述語名詞句は，談話内での文法上の特定化は受けているが，それ自体の指示する対象は，依然として存在していないのである。

第二の反例は，述語名詞句の指示性がはっきりしていないにもかかわらず，メタファとしての容認性の低い場合である。

(89) a．? Tom is some pig.

b．? Jesus is some shepherd.

c．#He is a certain fortress.

形容詞 "some" の使用は，それの修飾するものの指示対象の特定ができないという含意を生む。それにもかかわらず，(89a–b)は，メタファとしては受け入れ難い。(89c)が排除される理由ははっきりしている。"a certain" は語る主体自身はそれの修飾するものの正体を知っているが，わざと伏して言及しないという含意をもっているからだ。指示対象を，しようと思えば特定できるわけである。それだから，(89c)は，(85)の反例にはならない。

(89a–b)は，述語名詞句の指示する対象を特定できないが，存在することは保証できるようにみえる。それは，非メタファ文の次の用例からも支持できる。

(90) John has been seeing some girl. I don't know who she is. But I hear she is very charming.

John は「誰だかわからないが，ある女性とつき合っており」，人伝てにではあるが，「その女性がとても魅力的であること」は判明している。(90)から "some girl" の存在は，推論を介して保証される。それで，(91)のような談話は，不誠実なものとして拒絶され易い。

(91) #John has been seeing some girl. But, in fact, she doesn't exist at all.

(89a–b)がメタファとしては首をかしげざるを得ない理由も，"some pig" と "some shepherd" の指示対象の存在が暗示されているからである。それらの名詞句は，指示性という点では(89c)の "a certain fortress" よりは弱いかもしれないが，個別性の確保された特定的用法である。このような名詞句をメタファの述語の位置に導入することは，無条件には許されないのである。

第三の反例は，述語に固有名詞の現われるメタファである。

(92) a．Tom is Plato.

b．The Minister of Japan is John F. Kennedy.

c．Tokyo is Paris.

固有名詞は，常に唯一の指示対象を志向する特性を有している。それゆえ，"Plato" や "John F. Kennedy" の指示する人物はただ一人であって，複数の構成員から成るクラスの標示にはならない。同様に，"Paris" はフランスの首都だけを示し，日本の首都の別名にはなり得ないのである。

固有名詞は，なるほど，唯一の指示対象を示す場合には，数の対立，限定性，修飾語などを欠いているものと考えられるが，状況や条件しだいでは，普通名詞的な特徴を獲得するのである。

数の対立について言えば，一般に，固有名詞は(93a)のように単数形のみの用法しかもたないが，逆に，(93b)のように複数形だけの用法しかもたない。

(93) a．Indonesia —— ?Indonesias

b．the West Indies —— *a West Indy

(Quirk et al. (1985：288))

ところが，特別な条件の下では，固有名詞は唯一の指示性を喪失して普通名詞と化する。

(94) a．Shakespeares (authors like Shakespeare)

b．Smiths (people whose name is Smith)

c．Londons (cities called or resembling London)

(Quirk et al. (1985：288-289))

限定性に関しては，固有名詞の中には(95a)のように慣例上定冠詞をとるものもあるが，一般には冠詞類はとることができない。

(95) a．the Philippines

b．*a Japan

c．*some Japans

けれども，普通名詞化した固有名詞では，限定詞を先行させることができる。

(96) a．I used to know a Mary Roberts, too. (a person called Mary Roberts)

b．She is the second Mrs. White–the first one died.

c．Lu Xun has been known as 'the Chinese Gorki'.

(Quirk et al. (1985：289))

最後に修飾語であるが，唯一指示の固有名詞には，非制限的関係詞節や非制限的同格節のような非制限的な修飾語以外の修飾語はとることができない。

(97) a．Dr Brown, who lives next door, comes from Australia. (nonrestrictive clause)

b．Theseus, a Greek hero, killed the Minotaur. (nonrestrictive apposition)

(Quirk et al. (1985：290))

しかし，一時的ではあるが，固有名詞は普通名詞の特徴を付与されて，種々の修飾語をとることが可能になる。

(98) a. The flower arrangement was done by a Miss Phillips in Park Rord.

b. Do you mean the Memphis which used to be the capital of Egypt, or the Memphis in Tennessee?

c. I spoke to the younger Mr. Hamilton, not Mr. Hamilton the manager.

(Quirk et al. (1985：290))

このように，固有名詞は，条件さえ整えば，普通名詞化するのであって，その場合には，唯一指示性という本来の特徴を失なうのである。普通名詞化の条件は，たとえば，固有名詞により指示される対象が広く知られていたり，特定の状況の中で十分に一般化されている場合があげられよう。

固有名詞の普通名詞化という観点から(92)の各文を見るならば，述語名詞句は指示性を欠いているのだから，原則(85)を満足させており，メタファ文として適格であると判断される。

固有名詞を普通名詞的に用いている事実をより明示的に表わしているメタファも存在する。

(99) a. He is a Hitler.

b. He is a Napoleon of finance.

(Aarts and Calbert (1979：62))

(99)の述語名詞句は，固有名詞の前の不定冠詞によって(96a)や(98a)と同じく，普通名詞化していることを示している。

Geach (1968：42)は，メタファの述語名詞句での用法について，次のように述べている。

(100) ... in such cases the word alludes to certain of the object customarily designated by the proper name.[12)]

Geach の意見が正しいなら，普通名詞用法の固有名詞では，その指示対象がかなりステレオタイプ化していると言えるであろう。これは，はからずも，指示対象を唯一的に特定できないにもかかわらず，メタファ文を成立させている主語名詞句の特性を想起させるのは，実に興味深いことである。

想定し得る三つの反例は，原則(85)を直接に脅すものではなかった。但し，第二の反例のように，指示対象を唯一的に指定できないが，特定性の含意のある場合を排除できるように，修正する必要はある。この路線に従って，(85)を修正した代案を，次に提示する。

(101) 名詞的メタファ成立のための述語名詞句に関する一般原則（改訂版）：

名詞的メタファが成立するためには，述語名詞句は指示対象や指示対象の含意をもってはならない。

2－1－3．ま と め

名詞的メタファの二つの名詞句，主語名詞句と述語名詞句の特性を，主として，指示性に着目して観察してきた。名詞的メタファ成立のための二つの名詞句に関する原則が，指示対象の有無によってはっきり対立するという事実は，言語の一般的な述語機能の典型を示しているように思われる。リクール(1984：159)は主語と述語の機能の非対称性について，次のように語っている。

(102) 言語は一方では名ざされた個体に根ざしながら，他方では質，類，関係，行動など，原則として普遍的なものを述語する。言語はこうした二つの機能の非対称性を基盤にして働くのである。……存在概念は，言語の個別化機能と結びついている。論理的に固有な主語は，潜在的には存在者である。……それに対して，述語機能は普遍者を思念して，非存者に関わる。……したがって，これら二つの機能の非対称性は，主語と述語の存在論的対称性である。

主語と述語をめぐる存在者と普遍者（非存在者）の機能上の対極関係を，直接的に表示し実現している言語表現が名詞的メタファであると考えるなら，これまで行なってきた観察は容易に説明がつくはずである。名詞句の志向する指示対象の有無は，単にそれが存在するか否かの問題なのではなくて，固有に存在者であるのか非存在者であるのかが重要になってくるのである。なぜなら，非存在者とは，それが固有に非存在という本質を備えている存在者であり，それを基盤にしてはじめて，存在者について，質，類，行動，関係等を叙述することができるからである。[13)]

ともあれ，指示性に焦点を当てて，主語名詞句と述語名詞句について各々立てられた一般原則を改めて綜合し定式化し直すと，次のようになる。

(103) 名詞的メタファ成立のための名詞句に関する一般原則（決定版）：

名詞的メタファが成立するためには，主語名詞句は，少くとも語る主体によって投射された指示対象をもたなければならないが，一方，述語名詞句は，指示対象や指示対象の含意をもってはならない。

2－2．be 動詞の機能

名詞述語文の繋辞 (copula) の be 動詞には，複数の機能のあることが主張されている。

Declerck (1984：131，132) は，copula の be 動詞を二つに分類している。一つは特定的な (specificational) be で，基底構造で be の主語である名詞句について，述語名詞句が或る価値を指定するような場合に，この機能が効力を発揮する。

(104) a .(Who's the chairman of the club?) –The chairman is Ted Lee.

b .The only man that can help you is the President himself.

(Declerck (1984：131))

もう一つは叙述的な (predicational) be で，特定的な be のように主語名詞句の指示対象を同定

するのではなく，単に，その名詞句についてさらに或ることを述べる場合に用いられる。「或るもの」というのは，たいていの場合，(105)が示すように，特性，役割，クラスなどの構成要素の指示である。

(105) a .John is a teacher.

b .Mary is a pretty girl.

(Declerck (1984：132))

「特定的」—「叙述的」という用語に対して，同じ概念を指すのに，「内包的 (intensive)」—「外延的 (extensive)」という術語を用いることもある。斎藤 and 鈴木(1984：71)は，この二つの be について，次のような解説をしている。

(106) a .John is a teacher.

b .*A teacher is John.

(斎藤 and 鈴木(1984：71))

(106)は内包性の be の例であるが，(106a)では，John のもつ属性の一つが，a teacher という形で主張されている。このような名詞述語文では，(106b)の示すように，主語と述語の順序を逆にすると，非文法的な文を生成してしまう。

他方，(107)の外延性の be では，(106b)のような順序の逆転が許される。

(107) a .John is the teacher.

b .The teacher is John.

(107a)では，John と the teacher は各々別個に独立したものとして存在していて，それを話し手が等号関係で結びつけることができると主張しているのである。主語名詞句と述語名詞句とは，be をはさんで対等の関係にあるのだから，(107b)のように，主語と述語を入れ換えても，適格な文が成立するのである。

Halliday (1967)でも，斎藤 and 鈴木(1984)と同じ用語を使って，それら二つの機能をさらに詳しく分析している。

彼によると，内包性と外延性の be には，(106)と(107)で説明した他に，二つの顕著な特徴が見られる。

第一の特徴は，内包性の be の述語は非特定的 (nonspecific) になる傾向があるのに対し，外延性の be では特定的 (specific) になる傾向がある。[14)]

(108) a .John is a teacher. (intension)

b .John is the teacher. (extension)

第二の特徴は，内包性の be はくびき語法による等位接続が可能であるが，外延性の be ではそれが不可能である。

(109) a .John is both a teacher and highly competent.

b .*The teacher is both John and highly competent.

c .A cat is mammal and also carnivorous.

d .*John is the tall one and also fat.

(Halliday (1967 : 70))

(109a), (109c) は内包性の be が用いられる例, (109b), (109d) は外延性の be が現われている例である。

内包性の be が (106), (108a), (109a, c) のような特徴を示す理由は, be の後の述語名詞句が属性を表示するからである。このタイプの be は, 属性を与えられる要素 (attribuant) の属性や性質に関する質問への答として現われる。

(110) a .What is John? –John is a teacher.

b .How rich is John? –John is very rich.

(Halliday (1967 : 67))

(110) の各質問に対する答は, 述語の位置に, (110a) では名詞句, (110b) では形容詞句をたてている。これは, 内包性の be の後では, 名詞句と形容詞句は共に叙述的な性質を帯びることを証明している。「叙述性」ゆえに, be の後には, (111) のように, 代名詞や固有名詞は出現し得ないのである。

(111) a .What is the teacher? –*The teacher is John.

b .How rich is John? –*John is very rich one.

外延性の be が (107), (108b), (109b, d) のような特徴を示す理由は, be の後の述語名詞句が主語名詞句と等価であるという同定性を表示するからである。したがって, このタイプの be は, (112) のような同定 (identification) についての質問への答の一部分に現われる。

(112) a .Which is John? –John is the tall one.

b .Which was Olivier? –Olivier was Hamlet.[15)]

「同定性」のゆえに, 述語の位置には叙述的な要素をとることができない。

(113) a .Which is John? –*John is a tall teacher.

b .Which was Olivier? –Olivier was an English actor.

幾人かの研究者たちの意見に沿って, 名詞述語文の be 動詞の機能と特徴を概観してきたが, 結局, 次の二つの行きつくことがわかった。

(114) 名詞述語文の be 動詞の機能と意味表示

a . 内包的 (叙述的)

(i)機能 : be 動詞の後の名詞句 (述語名詞句) は先行の名詞句 (主語名詞句) に付与される属性を表示する。

(ii)意味表示 : CAN BE CHARACTERIZED AS, or, HAVE THE ATTRIBUTE OF BEING

b．外延的（特定的）

(i)機能：be 動詞の後の名詞句（述語名詞句）は先行の名詞句（主語名詞句）と等価であるという同定性を表示する。

(ii)意味表示：BE IDENTIFIABLE AS or, CAN BE EQUATED WITH

では，名詞的メタファを(114)の機能と意味表示と照らして見たときに，どんなことが言えるだろうか。

(115) a．My husband is a carp.

b．The student is a catfish.

c．This office is a stockfish.

(115)は，述語に不定冠詞付きの名詞句をもつメタファである。これらのメタファ文は半ば慣例化している。

先に，be 動詞の機能を識別するための三つの特徴，すなわち，主語と述語の入れ替え可能性，くびき語法による等位接続の可能性，述語名詞句の特定性について論述したが，(115)の各文も，それらを判定基準にして観察することにする。

まず，主語と述語の入れ替えであるが，(116)に見るように，すべて不可能である。

(116) a．*A carp is my husband.

b．*A catfish is the student.

c．*A stockfish is this office.

次に，くびき語法による等位接続であるが，(117)の示すように，すべて可能である。

(117) a．My husband is a carp and highly ignorant.

b．The student is a catfish and highly lazy.

c．This office is a stockfish and highly vacant.

最後に，特定的か非特定的かであるが，これについては，述語名詞句の指示性をめぐる議論の中で十分論じ尽されている。原則(103)の後半で述べているように，述語名詞句は，メタファ成立のためには，指示対象も指示対象の含意ももってはならないのだから，当然，(115)の文の述語も非特定的ということになる。

以上の特徴から，(115)に現われている be 動詞は，叙述的な機能を有していることがわかる。

(118) a．The Lord is my light.

b．God is the monster of the deep.

c．Christ is the gate for the sheep.

(118)は限定付きの述語名詞句からなるメタファである。それぞれの文の主語と述語とを倒置すると，(116)の場合と違って，適格な文が生じる。

(119) a．My light is the Lord.

b .The monster of the deep is God.

c .The gate for the sheep is Christ.

それは，同定を求める質問への答に似ている。

(120) a .Who's my light? –My light is the Lord.

b .Who's the monster of the deep? –The monster of the deep is God.

c .Who's the gate for the sheep? –The gate for the sheep is Christ.

しかし，(120)のような質疑はあくまでも談話全体がメタファ化(metaphorization)されていてはじめて成立するものである。そうでなければ，(121)のようなちぐはぐな質疑になってしまう。

(121) a .What is my light? –?My light is Lord.

b .What is the monster of the deep? –?The monster of the deep is God.

c .What is the gate for the sheep? –?The gate for the sheep is Christ.

各問は，主語名詞句の特性から見て，当然妥当な "what" という疑問詞で始まっている。ところが，答は "who" を要求する述語で結ばれている。こうした食い違いは，質問が非メタファ文と受けとられるのに対して，答がメタファ文の身分を受けているところから発生しているようにも思われる。ということは，(119)を(118)の倒置形で，意味内容はどちらも同じである。すなわち，等号の左右の項が入れ替っただけであるとするには，(120)のような談話のレベルでのメタファ化が必要なのである。だとすれば，この時点で，(118)と(119)は名詞的メタファとしてではなく，文メタファとして位置づけなければならなくなる。

しかしながら，(119)を(118)と同値な文ではなく，強調形の文，文体上の倒置を被った文であると考えるならば，話は別である。それは丁度，次の倒置文と同じ効果をもたらすからである。

(122) a .On the wall is the Picasso's picture. (The Picasso's picture is on the wall.)

b .Over to the other side is crossing Martiné. (Martiné is crossing over to the other side.)

(122)はいわゆる主題提示文で，主語名詞句に焦点を当てるという機能を担っている。(119)が(122)とパラレルな現象であるなら，倒置された主語名詞句は述語の位置にありながら，尚，主語としてふるまっていることになる。言い換えると，強調構文の焦点の位置にたつ主語と同一の立場にあるということである。

(123) a .It is the Lord who is my light.

b .It is God who is the monster of the deep

c .It is Christ who is the gate for the sheep.

それゆえ，形の上では(118)と(119)の関係は同定文の関係と同じであるが，機能の上では，後者は主語の焦点化を目ざすものであり，be 動詞の後の倒置された主語名詞句は，依然として主語であり続けるのである。

くびき語法の等位接続に関しては，適格文を生成することができる。

(124) a .The Lord is my light and highly reliable.

b .God is the monster of the deep and highly fearful.

c .Christ is the gate for the sheep and highly trustworthy.

特定性に関しては，原則(103)がそのまま適用し，限定詞があっても非特定的である。(118)に現われる be 動詞も(115)の場合とまったく同様に，叙述的な機能をもっているのである。

名詞的メタファの述語名詞句は，直感的にも，名詞性を問題にしているよりは，むしろ，その名詞句が表示し得る属性を問題にしているようにみえる。それは，述語名詞句の位置にしか入らない "a drag", "a gas", "a bummer" のような名詞に似ている。

(125) a .Bill, who is a drag, walked in.

b .*A drag walked in. (Jackendoff (1983))

Jackendoff (1983)は，これらの名詞は〔THINGS〕ではなくて，〔PROPERTIES〕を表示しているがゆえに，この特性が意味的に見て妥当な述語名詞句の位置にのみ現われるのだと主張している。もちろん，メタファ文中の述語名詞句は，彼のあげた名詞と異なり，それ自体で〔PROPERTIES〕を表示するのではなく，文のメタファ化がそれらを〔PROPERTIES〕に変えるのである。このことは，(115)の述語名詞句が慣習化して，叙述的な形容詞と意味的に等価になっている事実からも，間接的に証明できるのである。

(126) a .My husband is a carp. = My husband is ignorant.

b .The student is a catfish. = The student is snoring.

c .This office is a stockfish. = This office is empty.

X be Y 型の名詞述語文で，本来二つの機能をもっているはずの be 動詞が，メタファ化を被ることで，一方の機能に中和する現象が見られるのである。

(127)　名詞的メタファの成立過程

X be Y → Metaphorization → Neutralization of "be" → Nominal metaphors

名詞述語文がメタファ化により be 動詞を中和し，名詞的メタファへと変換していく過程全体を，メタファとしてとらえ直す必要がある。そして，be が中和することで，述語名詞句は唯一的に＜叙述性＞という特性を付与されるのである。

メタファの本質的な部分である中和現象を定式化すると，次のようになる。

(128) be 動詞の中和化の原則：

メタファを被った名詞述語文 (X be Y) の be 動詞は，唯一的に内包的（叙述的）機能へと中和される。

原則(128)は，名詞的メタファに於いて be 動詞の外延的（特定的）機能は排除されることを含意している。

3．メタファと認識構造

(129) a .John is a student.

b .Fido is a dog.

上記の文は，主語に指示性のある固有名詞，述語に指示性にない普通名詞，両者をつなぐ内包性の be 動詞からなる非メタファの文である。二つの文を be 動詞の機能に即して表示すると，次のようになる。

(130) a ."John" CAN BE CHARACTERIZED AS "a student"

b ."Fido" CAN BE CHARACTERIZED AS "a dog"

これは，"John" や "Fido" の指示対象が "a student" や "a dog" の各々が示す内包と外延をすべて合せもつということを述べている。つまり，"John" と "Fido" はそれぞれ，〔STUDENT〕と〔DOG〕のクラスの一員なのである。

(131) a .The man called "John" belongs to the class〔STUDENT〕

b .The dog called "Fido" belongs to the class〔DOG〕

主語と述語の帰属関係は，「主語∈述語」であり，主語の指示する対象がどのような目立った特徴を備えていようとも，それらはすべて捨象されてしまい。帰属先のクラスの含む特性のみに還元されてしまうのである。[16)]

(132) a .John majors in management and Dick specializes in economics. Both of them are students.

b .Fido is a beagle and Sue a poodle. Both of them are dogs.

それで，(132a)のように John と Dick が別個の研究をしていようが，(132b)のように Fido と Sue が異なる種類の犬であろうが，〔STUDENT〕や〔DOG〕のクラスの一員である事実には変わりがなく，そのクラスを規定している特性やそれと結びついている連想などを，余す所なく所有しているとみなされるのである。

名詞的メタファも，基本的には，(129)と同じであるから，それと類似した説明を施せるのだろうか。

(133) a .His wife is a cat.

b .Our days on earth are a shadow.

c .The Lord is my light.

(133)の三つの文を，be 動詞の機能に従って表示すると，次のようになる。

(134) a ."His wife" CAN BE CHARACTERIZED AS "a cat", or "His wife" HAVE THE ATTRIBUTE OF BEING "a cat".

b ."Our days on earth" CAN BE CHARACTERIZED AS "a shadow", or "Our days on

earth" HAVE THE ATTRIBUTE OF BEING"a shadow".

c ."The Lord" CAN BE CHARACTERIZED AS "my light", or, "The Lord" HAVE THE ATTRIBUTE OF BEING"my light".

けれども，(134)の表示は，実際には不適切である。"his wife"，"our days on earth"，"the Lord"は，字義通りの意味で，"a cat"，"a shadow"，"my light"ではないからである。非メタファの名詞述語文と違って，メタファ文ではbe動詞の前後の名詞句の間に断絶があるのである。この断絶は，「主語∈述語」の帰属関係を阻止する。

(135) a ."The woman called "his wife" belongs to the class〔CAT〕.

b ."The days called" our days on earth" belong to the class〔STUDENT〕.

c ."God called "the Lord" belongs to the class〔MY LIGHT〕.

主語の指示する対象はきわだった特徴をあくまで保持し，帰属先のクラスのもつ一般的な特性に還元されることはない。

(136) a .#His wife is a Persian cat and his daughter a Siamese one. Both of them are cats.

b .#Our days on earth are a thick shadow, but your days on earth are a thin shadow. In any case, they are shadows.

c .#The Lord is a lamp and the Landlady is an electric bulb. They are my light.

名詞的メタファにおける主語名詞の述語名詞句への帰属の不成功は，be動詞の内包機能と矛盾しているようにみえる。というのも，内包的機能を担っているのであれば，主語名詞句の指示対象はかならず述語名詞句の表示するクラスに属するはずだからである。

メタファ文の二つの名詞句の関係を注意深く見ていくと，次の事実が浮びあがってくる。それは，非メタファの名詞述語文とは反対に，名詞的メタファでは，二つの名詞句の帰属関係が逆転するということである。

例をあげると，(133a)では，主語"his wife"が述語の"a cat"の表わすクラスに帰属するのではなくて，"a cat"の表示する何ものかが"his wife"に帰属するのである。この帰属関係を(129)の非メタファ文と対比させて図示すると，(137)のようになる。

(137) a. John ⊃ Class of 〔STUDENT〕

b. his wife ⊃ Thing represented by 〔CAT〕

(137b)の特異な帰属関係が成立するというのは，主語名詞句の指示対象は固有の特性をすべて手つかずのままにしておいて，述語名詞句により表示されるものを新たに獲得するということを意味している。

「述語名詞句により表示されるもの」は，唯一的に特定化できるものではない。それは，言語共同体の中でコンセンサスを得ている価値であるかもしれないし，個人の私的な連想であるかもしれない。特定のコンテクストや状況で一回限り規定されたり付与されたりする意味であること

もあるだろう。いずれにしても，述語名詞句が表示の引き金になり，パンドラの箱のように，そこから様々な意味や価値や連想やイメージなどを取り出せるようにしてくれるのである。

この解釈の仕方は，(133a)のメタファに，千差万別の解釈を許す。

(138) a .His wife is jealous.

b .His wife is sexy.

c .His wife is hairy.

d .His wife looks delicious.

etc.

(138a)は慣習上定着している例だが，だからといって，猫がjealousな本性を固有にもっているわけではない。(138b–d)は，更に個人の体験や連想と結び付いているが，“cat”という語やそれが指示する対象に，その結び付きの責任はないのである。

ここで重要なことは，メタファをいかに解釈するかではなく，メタファの解釈を発動するものは何かということである。そして，それは，述語名詞句によって表示された何ものかであり，それが今度は主語名詞句の指示対象へと，be動詞の内包性の機能を媒介にして帰属するのである。この解釈の入力となるメタファの基底の意味表示の構造，言い換えると，メタファの認識構造は，次のような形をとる。

(139) 名詞的メタファの認識構造

X HAVE THE THING REPRESENTHD BY Y (or, THE THING REPRESENTED BY Y BELONG TO X)

X = subject nominal, Y = predicate nominal

名詞的メタファは，(139)の認識構造の言語的実現形なのである。(133)の各メタファの基底の構造を(139)に従って表示すると，次のようになる。

(140) a . His wife HAVE THE THING REPRESENTED BY a cat

b . Our days on earth HAVE THE EPRESENTED BY a shadow

c .The Lord HAVE THE THING REPRESENTED BY my light

(140)のすべてに出現する“THE THING”の正体が何であるのかについては，解釈に委ねられるのである。また，その正体が何であれ，名詞的メタファの解釈は，(139)とその具体的適用の(140)の認識構造に沿って，遂行されるのである。

メタファは，解釈の多様性，状況依存性，斬新性などのゆえに，従来複雑な言語現象として考えられ論じられてきたが，実際には，(139)で表示された単純な認識構造（非メタファの名詞述語文の帰属関係の反転形）に支えられた言語的実現形にすぎないのである。これ程単純素朴な本質をもつメタファを難しくしているのは，語る主体（あるいは，聞く主体）である私たちに原因がある。私たちは，いつでも，あるがままの実体を直視することから出発しなければならない。

註

1）“#”は文法上は適格であるが，解釈上は容認しがたいことを示す。“※”は文法上不適格であることを，“？”は解釈上の容認性の低いことを，それぞれ示す。

2）“getting”は補助動詞で選択制限には関与しない。

3）紙数の都合により，第1部（本稿）では，名詞的メタファだけを扱う。

4）Levinson (1983)，Miller (1979)は，BE (x,y) という形で名詞的メタファを表示しているが，$x \neq y$ という条件については言及していない。

5）ここでは，二つの名詞句の指示性については考慮に入れない。

6）たとえば，(2a)で，主語名詞句“the worm”がコンテクストから或る特定の人間を指示する場合を想定することも可能である。

(i) Tom is a worm. The worm is a worm.

この場合，主語はメタファを含み，(2a)の文自体もメタファ化を受けていると言うことはできない。なぜなら，メタファ化というのは，メタファを当該の文において成立させる時にはじめて生ずるのであって，すでにメタファ化を受けた後に生ずるのではないからである。(2a)について言えば，すでにメタファ化を受けたもの/こと，(i)では“Tom is a worm”がメタファ化を受ける文，について，新たに何かを陳述しているのである。

7）“a certain”は，それの修飾する名詞の指示対象を知っているのだが故意にその名を伏せる場合に用いる。一方，“some”はそれを知らない場合に用いる。

8）Brown and Yule (1983：213)は，指示対象と指示対象表現の直接的でない一致の例として，

(i) The ham sandwich is sitting at table 20.

という文を提示している。これは，ウェイターが調理場に料理の注文を告げる場合に言う言葉で，日本語の

(ii)僕はウナギだ。

という文と機能的に類似している。(i)の主語名詞句の直接の指示対象は，無論，“the ham sandwich”ではなくて“the man ordering a ham sandwich”であろうが，語用論的に“the ham sandwich”の指示範囲に“the man ...”も含まれているので，間接的な指示関係が成立するのである。このように，名詞句は指示のより広い範囲を指し示すことによって，指示対象を間接的に特定することもできるのである。

9）Jakendoff (1983：78)によると，〔TOKEN〕は潜在的に複雑な内部構造をもつ心的な構成概念であって，知覚に対して統合された#entity#として投射することができる。一方，〔TYPE〕は，人間が或る範疇を習得する際に作り出し貯蔵するような情報のことである。

10）但し，談話全体が隠喩化されている場合には，その限りではない。その場合には，the woman = I, the chronometer = Christ, the shadow = our days on earth という解釈が成り立つ。

11）このことは，be動詞の機能とも関連している。というのも，X be Y 型の be 動詞には少なくとも二つの機能が識別され，各々の機能と名詞句の指示性とはある種の相関関係にあるからである。尚，詳細については後述する。

12）Aarts and Calbert (1979：62)より引用した。

13）名詞的メタファの叙述機能，いかなる特性をもつかに関する詳しい議論は，be 動詞の考察の所で展開する。

14）Halliday (1967：70)では，述語ではなく補語 (complement) を用いているが，本稿の先行の記述との一貫性を保つということから，述語という語を用いることにする。

15）Halliday (1967：70)は，(112b)の問いに対して二つの答え方のあることを記している。

(i) Which was Olivier?

a. Olivier was Hamlet.

b. Hamlet was Olivier.

a は Olivier の演じている役割についての問いに対する答，b は Olivier の同定化の問いに対する答であるという。主語と述語の転換の及ぼす機能の違いのあることは確かだろうが，ここでは本論と関係ないので，詳細には立ち入らないことにする。

16) "∋" は右項が左項に帰属することを，"∈" は，反対に左項が右項に帰属することを示す。

REFERENCES

Aarts, J. M. G., and J. P. Calbert. (1979) Metaphor and Non-Metaphor. Niemeyer.

Beekman, J., and J. Callow. (1974) Translating the Word of God. Zondervan Publishing House.

Black, M. (1962) Models and Metaphors. Ithaca.

____. (1979) "More about Metaphor," in Metaphor and Thought, (ed.) A. Ortony., p 19-43. Cambrige Univ. Press.

____. (1981) "How Metaphors Work : A Reply to Donald Davidson," in On Metaphor, (ed.) S. Sacks., p 181-192. The Univ. of Chicago Press.

Bókai, A. (1983) "Possible World Theory and Literary Interpretation," in Semiotics Unfolding, vol. II, (ed.) T. Borbé., p 767-773. Mouton.

Cohen, L. J. (1979) "The Semantics of Metaphor," in Metaphor and Thought, (ed.) A. Ortony. p 64-77. Cambridge Univ. Press.

Davidson, D. (1981) "What Metaphors Mean," in On Metaphor, (ed.) S. Sacks., p 29-45. The Univ. of Clicago Press.

Eco, U. (1984) "The Semantics of Metaphor," in The Role of the Reader., p 67-89. Indiana Univ. Press.

Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation," in Syntax and Semantics 3, (eds.) P. Cole and J. L. Morgan., p 41-58. Academic Press.

____. (1978) "Further Notes on Logic and Conversation," in Syntax and Semantics 9, (ed.) P. Cole., p 113-127. Academic Press.

Givón, T. (1984) Syntax : A Functional-Typological Introduction Volume 1. John Benjamins Publishing Company.

Halliday, M. A. K. (1967a) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part 1," Journal of Linguistics 3, p 37-81.

____. (1967b) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part 2." Journal of Linguistics 3, p 199-244.

池上嘉彦(1984)記号論への招待。岩波書店.

Kittay, E. (1981) "Semantic Fields and the Structure of Metaphor," Studies in Language 5, p 31-63.

Lakoff, G., and M. Johnson. (1980) Metaphors We Live By. Univ. of Chicago Press.

Levinson, S. C. (1983) Pragmatics. Cambridge Univ. Press.

Lyons. J. (1981) Language, Meaning and Context. Foutana Paperbacks.

Miller, G. A. (1979) "Images and Models, Similes and Metaphors," in Metaphor and Thought, (ed.) A. Ortony., p 202-250. Cambridge Univ. Press.

Morgan, J. L. (1978) "Two Types of Conversation in Indirect Speech Acts," in Syntax and Semantics 9, (ed.) P. Cole., p 261-280. Academic Press.

Mosdell, C. (1984) The Beatles. Kinseidoo.

尾上圭介。(1984)「主語・主格・主題」日本語学4，p30-38.

リクール，P. 著　久米博訳，(1984)　生きた隠喩。岩波書店.

斎藤武生・安井泉. (1983)　講座学校英文法の基礎　第二巻『名詞・代名詞』　研究社.

斎藤武生・鈴木英一. (1984)　講座学校英文法の基礎　第三巻『冠詞・形容詞・副詞』　研究社.
Searle. J. R. (1978) "Indirect Speech Acts," in Syntax and Semantics 3, (eds.) P. Cole., and J. L. Morgan., p 59-82. Academic Press.
____. (1979) "Metaphor," in Metaphor and Thought, (ed.) A. Ortony., p 92-123. Cambridge Univ. Press.
菅野盾樹・(1985)　メタファの記号論。勁草書房.
Wilson, D., and D. Sperber. (1979) "Ordered Entailments : An Alternative to Presuppositional Theories," in Syntax and Semantics 11, (eds.) Ch-K. Oh., and D. A. Dinneen., p 299-323. Academic Press.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman.

(昭和61年5月21日　受理)